# 批評・紹介

## タングート古代史研究

岡崎精郎著

昭和四十七年十一月　京都　東洋史研究會　A5判　本文三六六頁　索引三七頁

本書は東洋史研究叢刊第二十七として東洋史研究會が昭和四十七年十一月に刊行したもので、著者が昭和十七年に京都帝國大學文學部を卒業していらい、約三十年間にわたり努力してきたタングート古代史に關する研究成果をまとめたものである。今回、この書を得たことは同學の人々とともに最近の學界の慶事としてよろこびに堪えない次第である。筆者は研究がかなり著者のそれと關係してくる面があるため、かねてから著者の面識を得、時には拔刷の惠送にも預り啓發を受けてきた者であって、二十年以上も前にさかのぼるがまだかけだしの研究生の頃、著者の私宅に赴いて遠慮なく河西史や甘州ウィグルについて見解を承ったことがある。こうして筆者はタングートの專門家ではないが從來の著者の研究經過の概略を一應存知しているつもりであって、それに最近本書を一讀する機會を得たので、ここに本書の内容を簡單に紹介してみたいと思う。

本書の主要部分は隋唐代から北宋期における西夏建國にいたるまでのタングート發展史を時期順に述べたものであるが、全體が論文形式をとり、序論、第一篇、第二篇、第三篇、結論となっており、最後に附錄第一、第二、第三を附している。本文の各篇とも序說、本論、結語という形式を踏んで論述している。

第一篇は「唐代および五代におけるタングートの發展」で、第一章「唐代におけるタングートの發展」、第二章「五代期におけるタングートの研究――夏州政權の展開を中心として――」から成っている。第一章の内容はかつて著者が大學を卒業するに當り提出した論文「唐代における黨項の發展」であって、昭和二十二年に東方史論叢第一に掲げた同題名の論文を訂補したものである。これは著者の學界における活動の最初として記念すべき論文であるが、その内容は序說、第一節唐代タングートの部族社會、第二節隋、唐と吐谷渾との間におけるタングート　㈠隋、吐谷渾とタングート、㈡唐、吐谷渾とタングート、第三節唐と吐蕃との間におけるタングート　㈠吐蕃の進出とタングートの動向、㈡河隴陷沒後における内屬タングート　㈢平夏部と東山部　第四節勃興期のタングートと唐の支配　㈠邊將の暴政とその影響、㈡武宗、宣宗の世におけるタングートの叛亂とその對策、第五節唐末におけるタングート――平夏部の活躍と定難軍節度使李氏の成立――、結論となっている。この第一篇第一章は本書の各篇各章を通じてもっとも多くの紙數を費しているのは、それだけ著者の若き情熱を傾けた力作だからである。

第一篇第一章はまず序說においてタングートが西夏を建國したことは東洋近世史上において重要な意義があると指摘し、しかもその建國の基礎は既に唐代において着々と進められていたと述べている。そしてタングートががんらいの居住地であった青海省方面より四川省西北部にかけての地域から、唐初、吐蕃の進出とともに唐に

内屬し、東北方に移動して、甘肅、陝西北部、オルドス方面に廣く分布し、中唐より晩唐にかけて著しく勃興し、その平夏部の部酋拓拔思恭が唐末の混亂を機として銀、夏の地に勢力を増大し、中和元年（八八一）に定難軍節度使の地位を得るにいたり、さらに五代の亂世期に入るにいたるまで唐一代を通じタングートの發展をあとづけ、西北邊疆におけるその勢力の確立過程を論じている。第一節においてタングートの部落組織を論じ、その最強部族である拓拔氏と鮮卑の拓跋氏との關係に觸れているのは、本書が通じて政治史的叙述であるだけに興味の惹かれる部分である。第二節はタングートと吐谷渾との關係を論じるが、隋代にこの兩者は緊密な連繫を保っていたが、唐の貞觀六年（六三二）、タングートの拓拔氏を吐谷渾から分離して、唐は西方拓疆上非常な成功を收めたと述べている。この見方は正しいと思う。

第三節では諸史料を引いて吐蕃の進出を述べ、これにともなうタングートと吐蕃との關係を論じ、内徙した拓拔氏以外の多くのタングートは吐蕃の下に屈服したとし、河隴陷沒後の内屬タングートについて檢討を加えているが、内徙せず故地に殘留したタングートが吐蕃の傘下に入り、弭藥と稱されたことを論じるに際し、西田龍雄博士の西夏語の研究結果を引用している。なお、吐蕃の支配下にあった嗢末（渾末）について、小野川秀美博士の說を承けて、それはおそらく吐谷渾の部衆で吐蕃に支配されたものであるとしているが、これはよほど愼重に檢討する必要がある。從來、論者によって嗢末を弭藥と對比して考える者も居るが、嗢末と弭藥とを類似のものと考えるのは無理ではないか。新唐書卷二一六下吐蕃傳に見えるように、嗢末はがんらい吐蕃の下に立つ弱者であることは明らかであり、その奴部であって、吐蕃は出師に際し必ず嗢末を從えたのであるから、これを直に吐蕃に支配されるようになった吐谷渾の部衆と斷定するには疑問が殘る。一體、唐後半期から北宋期にかけて漢民族周邊の諸民族の社會も大きく變化しつつあって、ウィグルにおいても吐蕃においても下層の者が支配階層を凌いでいく傾向が看取せられ、かつて故前田直典氏が指摘したように中國社會が唐宋の變革を迎えている時にこれをとりまく東アジアの諸民族社會も舊來の體制から新たな體制に變化していくのであって、このような東アジア全體に對する巨視的立場から溫末の擡頭を考えねばならないのでないか。唐末から北宋初期にかけて溫末が擡頭してきたことは西北邊疆史の一大事であるが、この問題を論じていけば單なる書評の域を脫するので、ここでは問題の所在を指摘するに止める。本章は宮崎市定博士、小野川秀美博士、佐藤長博士その他先學の研究を注意深く引用し、詳細な補注にこれを示し、丹念に史料を探索して考證をすすめている。

第二章は五代期におけるタングートを論じた研究であるが、これは著者が昭和二十九年に東方學第九輯に掲げた「五代期における夏州政權の展開」に手を加えたものである。この章は第一章の後を承けて五代期におけるタングート諸族、中でもその中心的存在であった定難軍節度使李氏（拓拔氏）の動向を五代諸王朝と遼との關連の下に、タングートがどのような經過をたどってその勢力を擴張してきたかを述べたものである。内容は序說、第一節五代初期の李氏、第二節五代王朝と遼の間におけるタングート諸族の動向、第三節夏州防衛戰をめぐって、第四節李彝殷時代の夏州、結語となっている。

夏州の李氏は後梁に服し、ついで後唐に服するが、その位置が契丹と中原との中間に介在するため、五代諸王朝にとって夏州タングートは警戒すべき存在であって、李氏と契丹との連繋説さえ生じたと指摘し、後唐が夏州を攻撃して失敗したこと、この後、李彝超、李彝殷の時期を經、後晉、後漢の勢力の微弱な時期に乘じ夏州に獨立政權を固め得、後周の時期になってもこの獨立體制はほとんど變らなかったと論じている。本章はたえず契丹と五代王朝の關係から夏州政權を論じているのは李氏政權の地理的意義を明かにしたもので正鵠を得た論であるが、ここではなお夏州が無定河上流域のまことに絕好の牧地に惠まれた、夥しい畜産のある地域である點を論じる必要があろう。がんらいオルドス沙漠東南緣邊は無定河流域や窟野川流域など綠地に惠まれ北魏の時期からきわめて豐富な畜産があり、それは北魏の世祖が赫連昌の據る無定河上流の統萬城を陷れた時、莫大なる畜産を得ていることからでも察知されるのであって、李氏の夏州政權の經濟的基盤がこの無類の畜産地域を占據しているという事實にもとづいている點を明かにするべきではないかと思う。著者が一三九頁において李仁福が龍德二年（九二二）、後晉に馬五百匹を獻じ、これが他のタングートの貢獻する畜産より多いことを述べ、また一四五頁―一四六頁にタングート諸族貢獻物表を掲げて、貢獻物の中では壓倒的に畜産物の多いことを示しているものの、夏州が特に豐富な畜産地域であることを論じていないのは殘念である。

第二篇は「西夏建國前史の研究」で、序說、第一章李繼遷の興起前後、第二章宋初における二三の禁令とタングート問題――李繼遷の興起をめぐって――、第三章李德明時代の研究――その經濟外交を中心として――、結語から成っている。第一章は昭和四十二年、追手門學院大學文學部紀要第一に載せた「宋初における夏州政權の展開と貿易問題――西夏建國前史の一節として――」の一部を材料としているほか、ほとんど別に書き下したものであり、第二章は昭和三十四年、東洋史研究第十八卷第一號に掲げた同題名の論文を訂補したもの、第三章は前記の追手門學院大學文學部紀要第一に掲載した論文の一部を補ったものである。第一章は序說において、既に唐末にタングートの李氏が中國の西北角に確固とした勢力を築き、五代を通じてその勢力を確立したが、強大な宋の壓力が波及するに及んで李繼捧はついに屈服したが李繼遷は執拗に抵抗し、靈州を攻陷し、西夏建國の基礎を固めたことを概觀している。そして第一節に「宋初における李氏の動向」を掲げ、宋の太祖のタングート招撫策が進んで、太平興國四年（九七九）、府州、豐州方面のタングートが宋に來貢し、夏州の李氏政權がその壓迫を蒙っていく樣相を論じているが、これが宋遼二國がタングート諸部を爭う前觸れであるとしている。この時、太平興國四年に拓拔日榮が所部の囉朗吹裕勒を宋に朝貢させたが、著者は囉朗吹裕勒の居住地が豐州路に當っていたことに注目し、これが宋に歸附するに及んで宋の夏州李氏政權に對する支配が不動のものになったと斷じている。

第二節は「李繼捧の繼承と內徙事件」で、太平興國五年（九八〇）に從來の父子相續の慣例を破って李繼捧が兄弟相續によって繼承すると、李氏政權に動搖が生じ、內亂がおこったこと、宋がこれを機とし李繼捧を內徙し、彰德軍節度使に任じ相州に轉出せしめ、その據點地であった夏州から李繼捧を逐い拂ったことを述べている。第三節は「李繼遷の擧兵と抵抗戰爭」で、李繼捧の宋への內

附、内徙に反し、その族弟李繼遷は唐代いらい李氏が保持してきた傳統的據點地夏州を守る最後の一人として宋に激しく抵抗した始末を述べている。第四節は「宋遼間における李繼遷の動向」で雍熙三年（九八六）、李繼遷と宋とが全然、沒交渉となって、翌年雍熙四年（九八七）李繼遷は遼に降り、これを轉機として從來宋に入貢していた西域諸國も宋への入貢を止めて遼に來朝するようになったこと、李繼捧と李繼遷とが對立したが、ついに李繼捧も遼に入貢するにいたったことを述べている。ここで論述をすすめるに當り、宮崎市定博士の「西夏の興起と青白鹽問題」（東亞經濟研究 第十八卷第二號）を踏まえ、宋がタングートの青白鹽採取を嚴禁したことは彼等を食糧攻めにしたことになり、追いつめられたタングート諸部が大同團結して叛亂するにいたったと述べている。そして結語において李繼遷の叛亂を要約してまとめ、李氏（拓拔氏）の世系表を掲げている。

第二章は序說において中國の歷史上、塞外民族と漢民族との通婚、混血が有した重要な意義を述べ、第一節に「女口私市の禁」を掲げ、タングートが中國に來て、女口を私市して歸還するのを禁じた事情を說明し、第二節は「宋初のタングートと流民問題」で、宋がタングートに沒入した流民の回收に努めたことを述べている。第三節は「西北邊の動亂と人口賣買」で、宋が漢人が塞外に流出するのを禁じたにも拘らず、西北邊において漢人は依然として蕃部に沒入し、人口賣買が行われたこと、第四節は「蕃漢通婚とその禁令」で、至道元年(九九五)、西北緣邊諸州の漢人が內屬したタングートと婚姻することを禁じたことを述べ、五代いらい見受けられた蕃漢通婚が全く禁絕された事實に注目し、第五節「蕃漢通婚禁止令の背景とその意義」において通婚を禁止したのは李繼遷の勢力が擴大してくるので、これに宋が對應したものであるとしている。結語において著者は女口私市を禁止した歷史的背景は李繼遷の興起による西北邊の緊迫した情勢にあると論じ、西夏の支配者層において蕃漢通婚は屢見するが、西夏建國よりその崩壞にいたる二百餘年間にわたって西夏國內の漢人は異民族支配下にあってなおタングートと混融せず、元代に入ってもタングート沒入漢人は「漢河西」として、タングートである「蕃河西」と區別されたと指摘している。視野を元代にまで擴げて論じるに敬意を拂うが、この場合、漢人がタングートに沒入していく際、オルドス沙漠南緣の白于山塊附近すなわち宋の保安軍順寧塞附近から流亡していくことが多いのに注意を向ける必要があろう。

第三章は「李德明時代の研究」であるが、保安軍における榷場の成立までと、この以後とに分けて考察している。序說において李德明活躍の意義を概說し、第一節に「榷場の成立をめぐって」を掲げ、李德明がついに景德四年（一〇〇七）七月に保安軍榷場に赴いて交易する權利を得た次第を述べ、遼のようにまだ國家體制の整わない李氏が宋と榷場において交易することは特筆に價すると言っている。そして李氏から宋への入貢に際し將來される品目も唐、五代、宋初の場合はほとんど馬匹であったが、この時期の貢獻品はヴァラエティーに富んでいることに着目し、これは河西ウィグルの入貢品目であるとし、李德明時代にはタングートは河西ウィグルの對中國貿易の仲繼をしていたと論じている。この指摘は李氏の交易活動上、非常に重要な意味を含んでいる。たしかに李氏の將來品目には甘州ウィグルの貢獻品目が見え、李氏がこの頃、河西ウィグルを

支配し始めた意義は大きい。試みに宋初から嘉祐八年（一〇六三）にいたる間における西涼府、甘州の宋への貢獻品目を調べると西涼府（涼州）からはほとんど馬だけが貢獻されているのに反し、甘州からは玉類、寶貨類、硇砂、乳香など西方から流入したと思われる諸種の貨財が貢獻されている。河西ウィグルの最大の集團は甘州ウィグルであることは言うまでもない。第二節は「その後における經濟成長と政治發展」で、保安軍榷場における交易權獲得後、さらに交易を求めて李德明が入寇したこと、甘州ウィグルを攻擊して遼と爭ったことを述べ、ついに天聖六年（一〇二八）に李德明はその子李元昊をして河西ウィグルの本據地である甘州を占領せしめ、ここに西夏建國の基礎を固めたと結んでいる。

第二篇は「タングート・ウィグル關係の研究」である。その第一章タングート・ウィグル交涉史の研究は昭和三十五年、第五回日本西藏學會紀要に發表した「タングート・ウィグル交涉過程の研究——西夏建國史の一節として——」を訂補したものである。第一節は「唐・五代における交涉過程」で、甘州に移住したウィグルの宋への入貢路をタングートが脅かしたこと、宋が甘州ウィグルの入貢路確保に重大な關心を拂っていることを述べている。第二節は「宋初の河西ウィグルと李氏」で、李繼遷の西涼府攻擊、李德明と甘州ウィグルとの戰いについて述べ、第三節に「李氏の河西經略」を掲げ、李德明の西涼府占領、李元昊の甘州占領と、これにともなう遼・宋の態度に觸れ、大食の海路入貢など、タングートの河西占領が東西交通上大きな變化を引きおこしていることを指摘している。また、李元昊が湟河流域に侵入し、青唐族大首領嗚厮囉麾下の軍を破ったこと、瓜、沙、肅三州も陷って河西通廊が完全に李元昊の支配下に入ったことを述べている。李氏の河西通廊制壓がすすんでいくにしたがい、甘州ウィグルに新な動きが生じ、これをめぐって宋、遼の角逐が展開されるが、著者はこの際生じた東西交易路の大きな變化に注目している。著者の大局觀は妥當なものであるが、望蜀の言ではあるが、李氏が河西通廊を東方から逐次に制壓していくにしたがって東西交易路が變化し、河西通廊西方から、また河西通廊から中國內地に達する新な路が發生していく、たとえば大中祥符四年（一〇一一）から宗哥路が、天禧四年（一〇二〇）から秦州路が、天聖中期（天聖は一〇二三—一〇三一）から青海路が展開していくのであって、このような點にまで觸れて論述をすすめれば甘州ウィグルの激しい交易活動と、これを支配していく李氏の歷史的役割がより一層明瞭となると思う。

また著者は二六九頁に西涼府が李氏に沒する年代を大中祥符六年（一〇一三）二月と大中祥符八年（一〇一五）九月との間に考え、この考定には筆者の所論も參考にされているが、二七一頁に明道元年（一〇三二）に西涼府が完全に沒したと述べ、二一五頁、二六二頁、二九九頁などには咸平六年（一〇〇三）十一月に西涼府が李繼遷に占領されたと述べている。これは著者自身には充分理解していることと思うが一見、讀者を迷わせるから、咸平六年十一月は李繼遷の一時的占領に過ぎないこと、明道元年の占領は、その前にウィグルに奪回されていたものを李元昊があらためて拔いたものであることを說明する必要があろう。

第四節は「西夏支配下の河西」では西夏の支配下にありながらウィグルの勢力は相當なもので、西夏の支配を河西西部に限定して言えばおそらく點と線との支配に過ぎなかったと論じている。河西通

廊は言うまでもなく古來東西交通の要路が通じ、西夏がここを占有するとこの東西交通路は斷絶し、西夏の國境に沿って新な國際交通路が誕生するのであって、ここでは卓囉監軍司、黑山威福監軍司その他の監軍司の交通上の意義などの檢討から西夏國家の基盤とでも言うべき、その版圖の占める國際的視野における交通、交易上の重要意義にも觸れて論ずれば「西夏支配下の河西」の歷史的意味がさらに鮮明になったのでないか。しかし第三篇の後に掲げた結論にもあるように、これから著者の研究は西夏史に向うのであって、今後の成果に期待したい。第五節は「文化並びに經濟面におけるタングート・ウィグル關係」である。

第三篇第二章は「河西ウィグルをめぐる國際關係の研究——對遼關係を中心として——」である。これは昭和三十三年に石濱先生古稀記念東洋學論叢に收められている論文を訂補したもの。第一節は「河西ウィグルをめぐる遼と五代王朝」との關係を論じたもので、時を逐うて遼と河西ウィグルは緊密化するが、むしろ河西ウィグルの經濟活動は五代王朝を對象としたものであると述べ、第二節「河西ウィグルと宋、遼」では五代に引き續き北宋期に入っても河西ウィグルの宋への入貢が續いたこと、しかし李繼遷が遼に投降していらい、李繼遷は西方諸國朝貢使を宋から轉じて遼に赴かしめたことを述べ、時期とともに河西ウィグルの入貢をめぐって宋、遼の爭いが激化したと述べている。第三節は「タングートの河西占有と遼の對河西工作」である。宋、遼の河西ウィグルをめぐる角逐の間隙に乘ずるごとく、タングートの李氏が河西に進出し、李元昊が完全に河西全土を支配したことを說き、遼の河西對策が執拗に續けられ、遼使がウィグル路に由り靑唐に達していることに注目している。この章は第一章に述べた李元昊期の河西全土支配にいたるまでの政治史的記述の後を承け、これに對應していく宋、遼の態度と河西ウィグルの動向を述べたものである。最後に結論を掲げ唐代より宋初にいたるまでのタングートの歷史的發展を回顧して要約し、著者の關心はまさに西夏史研究に向わんとしていると述べ、その意欲を示している。

主論の後に附錄三篇が附せられている。第一は「タングートの民族信仰について」である。著者はタングート民族の民衆生活を直接規範したものは法ではなく、また佛敎でもなく、遼の場合と同じくシャーマニズムにほかならないとし、シャーマニズムがタングートに行われた證を諸史料を擧げて示し、特にシャーマンの祈禱師、醫師、占卜師の三機能について述べ、その占卜について四種の方法を擧げている。そして羊骨を灼いて占う方法が祭天のほかに行われていることを指摘し、マルコ=ポーロの記述と淸初の人黎士弘の西陲聞見錄の記錄とを結びつけて考察し、タングートにおける羊崇拜の成立問題に論及している。この問題を論じるに當り著者は西夏關係の文獻のほか、江上波夫、山田憲太郎、白鳥淸など諸氏の研究や、さらに哲學者高坂正顯博士の見解まで引いて、その幅の廣い學問を讀者に感じさせる。

附錄第二は「タングート慣習法と西夏法典」で、タングートが漢人と接觸するにしたがい展開させた法について論述している。この論文はまずタングート內部に血の復讎を重んずる慣習があったが、しだいに人命賠償の形態をとり、財貨を以って血讎に代えるようになったこと、仇讎などの裁判には烏桓の大人と同じく機能したと考えられる和斷官が居たこと、タングート法典が成立したのは西夏建

國後一世紀以上も經た後で、李元昊時代の律法書も李元昊の刑政の參考にしか過ぎなかったものとし、レニングラードのアジア博物館所藏コズロフ・コレクションの中で最近西田龍雄博士が天盛舊改新定禁令と修正したものに注目して、宋史夏國傳下と對照し、これを紹興十八年（一一四八）に增脩した律と考えている。

附錄第三は「高昌行紀に見える打當の語について」である。高昌行紀とは太平興國六年（九八一）に王延德が西ウィグルの本據地である高昌に使した時、彼が記した旅行記のことであって、原本は失われているが續資治通鑑長編卷二五、宋史卷四九〇高昌傳などに收められ、その原形を窺うことができるものである。この中に打當の語が使用されているのであるがスタニスラウス・ジュリアン（Stanislaus Julien）は擔保を與える意味に解し、白鳥庫吉博士はモンゴル語から解して租稅、徵發の意にとられたが、著者はこの打當は漢民族の言語から解せねばならぬと言い、石山福治氏の解意をとって、安排する、適當にこしらえ整理するの意としている。これについて最近、愛宕松男教授は著者の說に賛意を示した。（愛宕松男「斡脫錢とその背景（下）」（東洋史研究第三十二卷第二號）これら附錄三篇はいずれも附錄というものの、本論に論じたタングート族の社會に關する重要なことがらであって、讀者は必ず本論と併せ讀む必要がある。

以上、いくらか平板に流れた憾みもあるが本論の各篇、附錄三篇の內容を網羅的に紹介してみた。がんらいタングート族は唐、五代、北宋の西北邊疆史上の重要な意義を有する民族であるが、從來、種々な立場から諸家が論じている。宮崎市定、小野川秀美、藤枝晃、佐藤長、中島敏、西田龍雄、山本澄子等諸氏が各自の觀點から問題を取り上げ、研究した結果を發表している。筆者もまたかつて西夏時代の河西を避ける交通路その他について論じたことがある。しかし、これらの發表されているものはいずれも個々のタングート族に關した事項であって、著者のように一貫したタングート發展史の立場から論究したものではない。著者は大學卒業いらい、約三十年間の歲月を費して、タングートが唐代に吐谷渾と接觸し、吐蕃に逐われ、また唐に羈縻されてよりいらい、漢民族と契丹との間に介在して動搖しながらも、ついに李繼遷が傳統的根據地の夏州から興起して靈州を陷れ、河西東部を襲い、李元昊期の河西全土制壓、西夏建國にいたるまで屈折しながら發展していく樣相をみごとにまとめ上げている。先學の研究や論述する事項に關する論文は緻密、丹念に調査し、論を愼重に進めている。本文中に史料の出典を括弧に入れて一々示し、さらにこのほか各章ごとにその終りに補註を附している。これは行間に滲み出る愼重な論のすすめ方とともに著者の良心的態度の現われであろう。

若干、希望を言えば本書に地圖が一枚もないのはいかがなものかと思う。讀者の便に供するためにせめてオルドス沙漠、夏州、賀蘭山山脈、靈州、西涼府、甘州、河西通廊などの位置を示した地圖が必要であると思う。また李元昊期に成立した西夏國家については著者が論じたタングート・ウィグルの交涉のほかに檢討すべき事項が多く、特に交易、交通について國際的視野から論じる態度に缺けているのは殘念である。しかし、これとて結論に窺われるように今後の著者の研究に俟つところであろう。著者が西夏史研究の新しい成果を續々發表されるのを同學の士とともに期待したい。

要するに唐代いらい西夏建國にいたるまでのタングート發展史を

手際よくまとめ上げたことは學界にとって大きい收獲で、本書の出現によってタングート族に關した從來の個々の研究は新な意義を與えられたと言っても過言ではない。卷末の索引もタングート史に關する事項を調べるに際し研究者の便宜となろう。本書の内容の紹介に際し、所々に挾んだ妄評は偏えに著者の諒恕を請う次第である。

（前田　正名）

## 大會記事

本年度東洋史研究會大會の講演者並びに講演題目は次の通り決定致しました。

（敬稱略）

朱全忠政權の成立　大澤　正昭

二十世紀中國の一棉作農村における農民層分解について　吉田　浜一

唐代河北藩鎮における交易について　畑地　正憲

「開禧用兵」と韓侂胄政權　衣川　強

ティムール家に關する一傳承について　間野　英二

インドネシア共産黨とインドネシア協會　永積　昭

カイイムトゥ文書補論　山田　信夫

魏晉代の潁川庾氏について　多田　狷介

清代臺灣の水利組織について　森田　明

金の景祖について　三田村泰助

多數御來聽下さるようお願い致します。

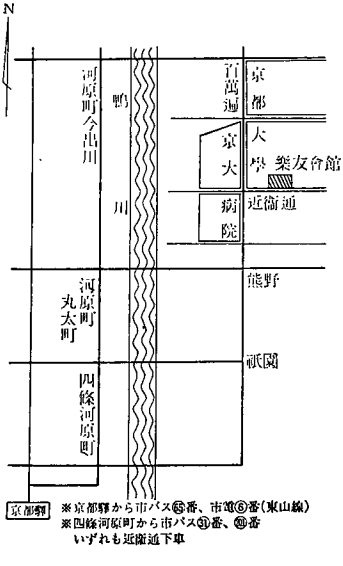
## 記

日時　十一月三日（祝）　午前九時～午後六時

場所　樂友會館講演室（二階）

京都市左京區吉田近衛町　電話（七五一）一一〇〇

なお當日は、大會終了後同會館内において懇親會を豫定しておりますので多數御參會下さい。




東洋史研究會